

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択) 中間評価結果

機関名	富山医科薬科大学	拠点番号	J09
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点プログラム名称 (英訳名)	東洋の知に立脚した個の医療の創生 (Advanced Approach to Personalized Medicine Based on Oriental Philosophy)		
研究分野及びキーワード	〈研究分野: 境界医学〉(オーダーメイド医療)(東洋医学)(伝統薬物)(ファーマコゲノミックス)(中国哲学)		
専攻等名	医学系研究科医科学専攻、医学系研究科認知・情動脳科学専攻、薬学研究科薬科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)	嶋田 豊 教授	他 12名

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について> 本教育・研究拠点は、東洋医学(漢方医学)、臨床医学(婦人科学、皮膚科学、眼科学)、基礎医学(生化学、病理学)、薬学(薬理学)、和漢薬学(生薬学、天然薬用資源学、薬物代謝工学)を集約する体制をとる。</p>
<p><本拠点の目的> 西洋医学の病態診断を「東洋の知」を動員して亜群に再分類のうえ、漢方方剤に対する反応性の差異(個人差)を先端的分子生物学的に解析し、普遍的な知とすることである。この臨床研究は医療の現場における個人差識別の具体的方法を提案することを目指している。さらに、個の医療を支える病態解析や薬物治療学の先端科学研究と、天然薬物資源の開発評価及び情報発信に関する基盤研究も遂行する。</p>
<p><計画：当初目的に対する進捗状況等> 1) 個人差の診断と分子基盤に関する臨床研究(プロテオーム解析研究)では、関節リウマチ、アトピー性皮膚炎等の症例を精力的に集積しており、確立したプロテオーム解析法を用いて漢方方剤の桂枝茯苓丸が適応となる関節リウマチ患者に特有の血漿マーカータンパクを発見した。 2) 病態解析研究と天然薬物基礎研究では、トランスジェニック動物(糖尿病モデル)の作製、生薬のDNA同定法の開発、薬用資源の栽培化と評価等の点で、新たな学術的知見が多数得られた。 3) 国際研究拠点形成へ向けて、COEホームページ開設、和漢薬研究推進ネットワーク形成、国際シンポジウム開催、海外研究交流拠点開設等を行い、情報発信と共同研究体制を整備した。 4) 学内公開の研究成果報告会(COE月次定例会)等の場を通して、本教育・研究拠点内の有機的な共同研究が格段に進展し、外国人留学生を含む若手研究者も活発に研究活動を行っている。</p>
<p><本拠点の特色> 本学のように先端科学技術を駆使し、しかも「東洋の知」と正面から取り組む教育・研究拠点は世界的にも例がない。「東洋の知に立脚した個の医療の創生」は、東洋医学そのものにとどまるものではなく、西洋医学にも適応し得る「個人差に基づく医療の原理」を国際社会に提言するものであり、医学・薬学・看護学等、全ての医療・保健分野に波及する画期的なものである。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性> 1) 個の医療の確立と普遍化は医療革命をもたらす：関節リウマチ、アトピー性皮膚炎、更年期障害、糖尿病等は、薬剤への応答性、合併症の進展等「個別性が高い」疾患である。本教育・研究拠点の成果はこれら諸疾患の治療学に大きな変革をもたらす。 2) 東洋の知が普遍的な知となる：新たに導入された医学・薬学コア・カリキュラムには「東洋の知」の修得が必須となったが、科学的な根拠を与える事によって実践的な知の活用が提言可能となる。 3) 本教育・研究拠点から生まれる伝統薬物の資源確保の方法論、及び東洋の知に立脚した基盤研究は薬学領域の新たなグローバル・スタンダードとなる。</p>
<p><本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> 1) 個人差を認識した「個」の医療の方法と、個人差を識別するための臨床検査技術を提供できる。 2) 東西医学を融和した治療学を実践できる医療人と、個人差を基盤にした薬理学研究者を育成できる。 3) 漢方薬(天然薬物)の基原と規格評価のエキスパートを養成できる。 4) 上記は国内にとどまらず、アジア・欧米等の海外の人材育成も視野にいれている。</p>
<p><本拠点における学術的・社会的意義等> 1) 東洋医学に対する国民のニーズは高く、漢方製剤は医療保険に導入されている。天然薬物に関連する基盤的研究も活発化している。医学・薬学教育のコア・カリキュラムにも「和漢薬」に関する知識が求められている。本教育・研究拠点の研究成果は医学・薬学教育にただちに還元される。 2) 欧米諸国においては、近年「相補代替医療」が注目されつつあり、天然薬物への関心が高まっている。本拠点はこの動きに対応できる唯一の教育・研究拠点であり、まさに国益にかなうものである。 3) 東洋の知に基づく「個の医療」を普遍的な知とすることによって、医療に革命的な発想の転換をもたらすが、これは我国のみならず全人類により良い医療を提供する突破口となる。</p>

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) 当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と判断される。</p>
<p>(コメント) 21世紀に入り、東西両医学の共通基盤構築への歩み寄りが目立つ。医療の現場において、「病気を治す医療から病者を治す医療」「無病化医療」への移行が国内各所で具体化しつつある。 本拠点で特に注目すべきは、東洋医学に近代科学の新しい手法を積極的に取り入れ検証していかうとする姿勢である。これにより、東洋医学の依って立つ独自の基盤を新たに構築しようとしている。その為の戦略を構想し、既にプロテオーム解析が試みられ、具体的な成果も上げられつつある。今後の方向として、プロテオーム解析に止まることなく、この方針を徹底させ、積極的に推進することが望まれる。 これにより、西洋医学との接点も拡大・強化され、従来、両者の間にとかく見受けられがちであった相互対立的な、あるいは並立的な関係を超えて、相互補完的あるいは相互受益的な、循環型相互作用を可能にする統合医学の樹立を目指す新たなプラトホームの創生が期待しうる。加えてこの新しいパラダイムの提示による若手人材の積極的育成が望まれる。 東洋医学部門を設ける大学医学部が増加しつつあり、治療の現場でもその好影響が現れはじめている。有機的連携の樹立を目指す新しい統合医学への方向を呈示し、それを目指す本拠点の着実な成長は、注目すべき段階に入りつつあり、世界をリードする拠点の樹立が十分に期待される。</p>